十和田市立中央病院
病院ニュース
さわらび
令和５年4月１日号

新年度ごあいさつ

病院事業管理者　丹野（たんの）　弘晃（ひろあき）

医療 DX

新しい年度を迎え、ご挨拶を申し上げます。DX という言葉が乱舞しておりますが、DX（デジタルトランスフォーメーション）とは、データやデジタル技術を用いて業務プロセスや既存の枠組みを変えていくこと、と定義されているようです。近年、様々な業種で DX 化が進んでいますが、医療分野は非常に遅れていると言われています。事実、新型コロナウイルス感染症において、患者情報収集がうまくいかず、医療現場の混乱を生む一因となり、医療データ活用の脆弱性が露呈される結果となりました。

この経験を踏まえてなのか､2022 年 5 月に自民党政務調査会より「医療 DX 令和ビジョン 2030」と題した、医療の DX 化・医療情報の有効利用を推進するための提言がなされました。その内容がいわゆる国の「骨太方針 2022」にも明記され、同年 10 月には医療 DX 推進本部が発足し、その加速が期待されます。具体的には、①「全国医療情報プラットフォーム」の創設、②電子カルテ情報の標準化、③診療報酬改定 DX、の三本柱から成っています。①については、オンライン資格確認等システムのネットワークを拡充して、レセプトや特定健診などの情報、予防接種、電子処方箋、自治体検診情報、電子カルテなどの介護も含めた医療全般の情報を共有・交換できるものと位置付けています。②については、医療情報を交換する際の国際標準規格である HL7FHIR を活用しながら、標準型の電子カルテを検討するようで、その上でまずは 3 文書（診療情報提供書・退院時サマリー・健診結果報告書）と、6 情報（傷病名・アレルギー・感染症・薬剤禁忌・検査・処方）を対象に標準規格を決めるとのことです。③については、現行のシステムでは診療報酬改定のたびに、複雑で膨大な作業が発生し、現場の大きな負担となっている訳ですが、この負担を軽減するために「共通算定モジュール」を導入することにより作業を効率化し、医療保険制度全体の運営コスト削減を目指す、としています。

以上のように、医療のデジタル化への対応は必須ですが、そのためにはそれに関わる人財を育成・確保しなければなりません。そして、何と言ってもそれによって組織がトランスフォームしなければ、まったく意味がありません。地域全体で取り組まなければならない部分も多いと思いますので、地域医療連携推進法人「上十三まるごとネット」も活用しながら、タイムリーな情報共有に努めて参ります。今年度もよろしくお願いいたします。

新年度ごあいさつ

院長　髙橋　道長（たかはし　みちなが）

新年度を迎えるにあたり、ご挨拶を申し上げます。新型コロナウイルス感染症が十和田市内で発生してから、まる３年が過ぎました。猛威を奮った新型コロナウイルスも、感染力は以前よりだいぶ低下してきたようにみえます。最近では当院へ入院する感染者もほとんどなく、５月からコロナ感染症が２類相当から５類に引き下げられます。コロナの再燃がなく、このまま、感染が収束に向かってくれることを心より望みます。

さて、今年度は、医師の働き方改革の達成のため、勤務時間短縮（時短）計画を早急に立案して、来年度早々には開始しなければなりません。個人個人が当事者意識を持って、勤務時間内は全力で仕事にあたることが時短には不可欠と考えられ、タスクシフト・タスクシェアも、その延長線上にあると考えます。綱引きの引き手が多くなる程、一人一人の個人の頑張りが少なくなり、少人数の相手に負けてしまうことはリンゲルマン効果（傍観者効果）と呼ばれています。私たちも、傍観者になることなく、当事者意識を持って、率先して仕事に取り組んでいくことが重要と考えます。

ここで、今年度の医師の転出などによる診療体制の変更についてお伝えします。血管外科は齋藤孝晶先生が非常勤医師に勤務変更することにより、週１回の診療体制へ、耳鼻咽喉科は野呂雅司先生の国保黒石病院への異動により、非常勤医だけ週４回の診療体制になるため、夜間・休日の救急診療を制限させていただくことになります。総合内科は総合診療科と標榜科名を変更し、鈴木直也副院長をトップに据えた診療体制へ変更いたします。総合診療科には当院の初期研修を終了した成田茂樹先生、荻野雅也先生が、青森労災病院からは手代森隆先生が専攻医として勤務し、若手による診療体制が充実します。次に、転入・入職される先生方をご紹介いたします。１年間大幅な診療縮小を強いられてきた呼吸器内科には、常勤医として伊藤貴司先生を、外科には岩間正浩先生を、整形外科には若本諒先生を、泌尿器科には尾﨑祐輔先生をお迎えいたします。さらに新規に初期研修医５名が加わることにより、院内の世代交代が進むことになります。

世界では、ロシア・ウクライナ戦争の和平交渉は頓挫し、停戦の気配は見えず、トルコ・シリア大地震では、５万人以上の方々が亡くなって、援助を求めています。自分自身で貢献できることを探してみたものの、少額の寄付の他には具現化は難しそうです。国内に目を向けると、地球温暖化のためか、桜の開花は例年より大幅に早まり、食糧などの生活必需品の物価や光熱費が上昇し、同時に少子化が予想をはるかに超えて進行するなど、将来が見通せない世の中になっています。このようなご時世でのWBCの日本チームの優勝は、わたしたちに勇気と希望を与えてくれました。当院についてみますと、内科系診療科を中心にして、若手医師が増員となり、急性期病院としての機能充実が確実に期待できそうです。足を地に据えて、職員一同一丸となって、日々の医療を遂行していきましょう。今年は、官庁街通りのお花見や流鏑馬を楽しむことができそうです。今年度も、何卒よろしくお願い申し上げます。